論文

経済活動を基礎とした俳諧ネットワークの政治運動化過程の一考察

── 秩父地方の寺社に奉納された句額を手がかりとして ──

土　屋　正　臣
城西大学　現代政策学部

要　旨

本稿は趣味縁の議論を踏まえて、文化活動を通じた社会参加が当時の政治や経済とどのように結びつき、その後いかに変化したのか、という点について明らかにすることを目的とする。

分析の主な対象は、養蚕や生糸生産が盛んであり、かつ秩父困民党事件に見られるような政治活動も旺盛であった近代の秩父地方を中心とする地域である。この地域の寺社に奉納された句額（句会後に複数のメンバーによって奉納された額）を現地調査により確認した。

分析の結果、経済活動に基づく俳句の創作活動でつながった人々のネットワークは、政治活動のように非常に高い公共性を帯びる可能性があることが明らかとなった。

キーワード：養蚕、俳諧ネットワーク、句額、趣味縁、秩父困民党事件

1. はじめに

1.1　文化活動と政治、経済をつなぐもの

本稿は一見、政治運動や経済活動とは無縁のものとして捉えられがちな文化活動の政治的・経済的影響について考察するものである。文化活動が決して、趣味の問題つまり「個」の問題ではなく、「公」の問題つまり高い公共性を持つと指摘したのは、梅棹忠夫だった[(1)]。梅棹の議論は、当時盛んに議論されていた文化行政論をさらに展開する上で大きな影響力を持ち、1970 年代後半以降の全国の自治体が文化行政を推進する理論的支柱となっていった。

文化政策学や文化経済学の領域を中心に、文化が「公」の問題として研究されてきた一方、やはり趣味というプライベートな領域として捉える人々は依然として多い。だからこそ、立場によって意見が分かれる表現方法を含めて、文化的な活動に公的な資金が投入されることに疑義を唱える人々が少なからず存在するのである。こうした状況に一石を投じたのが、2010 年代以降の文化活動に対する一連の研究である。

たとえば、浅野智彦は趣味によってつながる人々のネットワークを「趣味縁」と呼んだ[(2)]。そ

して、趣味縁という入り口が人々の社会参加になり得る可能性を示した。趣味のグループは、閉じた社会として捉えられがちである。趣味縁議論が注目されたのは、こうした内向的な社会が実は緩やかにその外側に広がるより大きな社会とつながっているという仮説を提示したことにある。

本稿はこうした趣味縁論を踏まえながら、かつての文化活動を通じた社会参加が当時の政治や経済とどのようにリンクし、その後変容していったのかという点を分析しながら、社会における文化活動の望ましい姿を考察することを目的としている。

そのためには資料が比較的そろっており、かつ一定程度時間が経過している事例を分析対象とすることが望まれる。そこで本稿は分析対象として、秩父地方を中心とする埼玉県北部から群馬県にかけての絹取引による経済活動と俳諧のネットワーク、秩父困民党事件の関係性を取り上げる。

1.2　分析対象と先行研究

①　分析対象

本稿が分析対象とするのは、秩父地方を中心とする養蚕地帯であり、句額と呼ばれる俳諧が記された額ならびに武術に関する額が寺社に奉納された地域である（図 1）。句額とは、俳諧の会などの催し物のあとで、参加者たちが歌を額に記し、参加者が氏子となっている地域の寺社に奉納した額である。句額の特徴は俳諧だけでなく、その詠み手の名と出身地が記載されていることで、俳諧グループを復元できるという点に特徴がある。

秩父地方を中心とする広範囲に存在する句額については、すでに森山軍治郎によって詳細な実

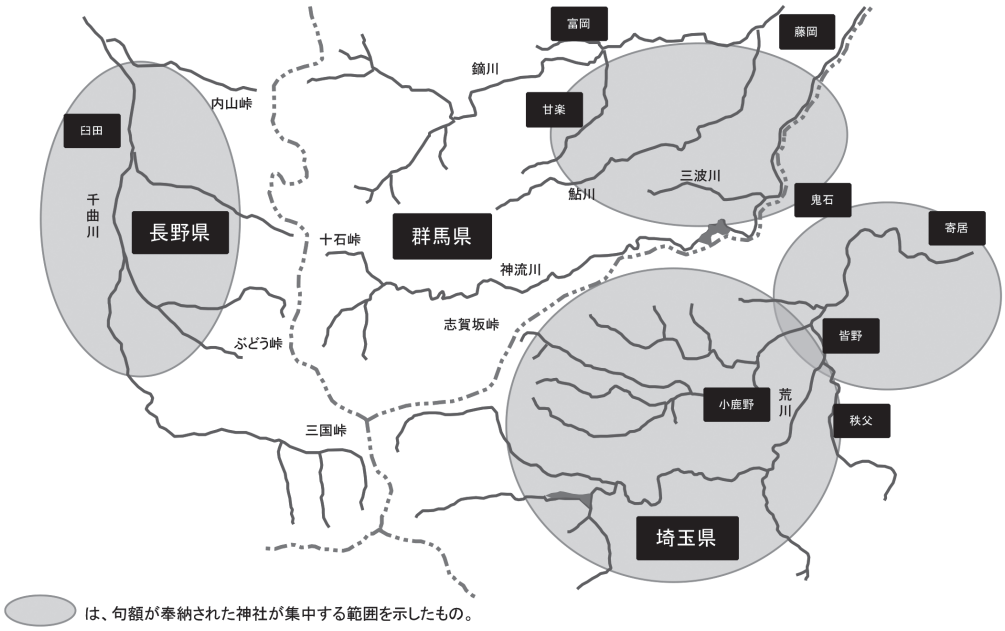

図 1　句額の分布範囲（森山軍治郎（1981）、p. 76 より筆者作成）

地調査が行われている。驚くことに、これだけ句額がこの地域の人々にとって身近な存在であるにもかかわらず、その体系的な悉皆調査は森山の調査以後も実施されていないため、現時点で私たちが全体像をつかむためには森山の仕事に頼る以外ない。このような事情から本研究は、森山の句額調査の結果と筆者自身による調査を併せて俳諧ネットワークの実態に迫ることにしたい。

この地域を調査・分析対象に選んだ理由は、単に多くの句額がこの地域の神社に奉納されているからだけではない。秩父地方から上州という山間地域は、近世・近代・現代を通じて一大養蚕地域として繁栄した。近世には、秩父や高崎、藤岡、富岡といった絹市において、都市部の呉服商が上州や武州の山間地域で生産された生絹の買い付けに訪れ、経済的に大きく発展を遂げた。近代に入っても、本地域は横浜港からの主要輸出品である生糸生産を支え、近代日本の産業の礎となっていた。

本地域は養蚕地帯であると同時に俳諧ネットワークの中心地であったことは、偶然ではなく、むしろ密接な関係にあった。たとえば、秩父市上吉田の米山薬師堂は、目の守護であると同時に養蚕守護として、人々の信仰を集めてきた。ここには万延元年（1860）の句額など複数の額が納められ、養蚕に携わってきた本地域の人々の間で俳諧の嗜みが存在していたことを伺わせる。

さらに重要なことは、俳諧ネットワークはこうした養蚕による経済活動とのつながりだけでなく、政治的なネットワークとの関連も想定されることにある。この地域は養蚕地帯であると同時に、1884 年に発生した困民党による秩父困民党事件発生の範囲でもある。困民党会計長の井上伝蔵は事件後に死刑判決を受けたものの、北海道へと逃れて 35 年間の潜伏期間を経て、生涯を終えている。その潜伏先である北海道で井上は、句会を組織するだけでなく、出身地である秩父地域とも俳諧ネットワークとの継続的なつながりを保っていた。秩父困民党事件のリーダーが俳諧ネットワークの中心であっただけでなく、そのネットワークに参加した数多くの人々がこの蜂起に参加していた。

つまり、点としての情報から俳諧ネットワークの社会的な意味について以下のような仮説を立てることができる。句額から復元される俳諧ネットワークは、山間部の孤立しがちな集落間を繋いでいた地域の経済活動をベースに拡大した。日常的な付き合いとして俳諧ネットワークが存在していたものの、ときに政治的スイッチが入ると、その文化活動ネットワークによって広範で、巨大な政治的影響力を持つ運動に転換しうる可能性を持っているのではないか。つまり政治と文化、あるいは経済と文化は、ゆるやかにつながり、社会に対してインパクトを持ち得るのではないかという仮説である。

②　先行研究

すでに述べたように、森山は 1884 年の秩父困民党事件が俳諧ネットワークを中心とする、中山間地域における文化活動を基礎としていたことを句額の実地調査を通じて明らかにした。森山の調査では、秩父地方を中心とする山間地域の神社に奉納された句額だけでなく、同時に柔術や剣術などの武術に関連する額を発見している。農村部においても武術が広く人々の間に浸透して

おり、武装蜂起との関連性を指摘した。

池上英子は、森山の研究を下敷きにした俳諧のネットワークだけでなく、連歌や茶の湯、生け花、浄瑠璃、園芸といった幅広い生活に「美」をもたらす「自発的なむすびつき」から日本独自の「市民的交際文化」の形成を近世・近代の事例から描き出した[(3)]。近世の俳諧ネットワークが都市に限定された文化活動ではなく、広く農村地域にまで広がっており、決して農村部が文化的な貧困地域ではなく、豊かな文化的ネットワークによって都市文化とつながっていたことを示した。こうした農村部における文化的ネットワークが成立し得た要件として、識字率の高さがあった。この点は森山も指摘したことであるが、高い教育水準を日本の農村部が有していたために、俳諧などの文芸活動が都市部以外の人々の間でも親しまれたこと、さらには秩父困民党事件における自由民権運動の展開を促した。また、池上は多摩地域における農民俳諧サークルが、自由民権運動を活発化させたことにも触れている。1881 年に多摩地域の人々の手によって「五日市憲法草案」が起草されるなど、近代における特徴的なデモクラシー運動が実践された。人権や市民的自由などの近代的な憲法草案の成立に重要な役割を果たしたのは、五日市学芸講演会という文化サークルだった。この事例を踏まえて、池上は政治的な変革を目指す各地の運動の下地となったのは、文化的・社会的なネットワークであったと結論づけている。

こうした近世における文化活動は、一見固定化されているかのような身分制の枠組みを超えて、さらには性別や年齢の垣根を超えて、人々が結集している点が重要である。武士であれば表向きの身分である武士階級にアイデンティティを持つ一方、文化活動においては武士階級に囚われないフラットな人間関係に基づく二次的なアイデンティティを形成していた。これを池上は、「アイデンティティ・スイッチング」と呼んだ。身分的な枠組みを前提としていては出会うことのなかった人々が、共通の文化活動を通じて交流を深め、時には政治的な活動へと転化しうる可能性を秘めていた。

浅野による議論は、ロバート・パットナムの社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）論を下敷きにして、このプライベートな文化的活動の場が、時として一揆や自由民権運動のようなパブリックな活動に転化しうるという可能性について指摘した点に特徴がある。ただし、浅野も断っているように、趣味縁を通じた社会参加は、文化活動の副次的産物でしかないということである。必ずしも文化的な活動の集まりが、社会に影響を及ぼすようなムーブメントにはならない。むしろ、多くの趣味的な活動は、プライベートな空間内に収まっている。

本研究もまた浅野の指摘には賛同したい。しかしながら、内向きな活動に終始しがちである趣味の活動が、時として公的な領域に関わることの意味を改めて、本研究で問い直したい。特に、これまでの先行研究では触れられてこなかった、文化活動と経済、政治の関係について素描してみたい。なお、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）論は、互酬性に基づく規範と市民参加のネットワークの意味を論じる上で重要な役割を果たしてきた。しかし、今日議論が重ねられる中で、社会関係資本という言葉は多義的な様相を帯びており、その議論を整理しないまま安易に用いることはできない。紙面の都合を勘案し、ここでは社会関係資本論との照合は別稿で論じる

ことにしたい。

2. 秩父困民党事件発生の背景

2.1　経済的背景

秩父地方を中心とする山間地域の近代における経済的背景を語る上で、国際情勢と地域特有の経済状況の二つに大別される。

日本は近代国家の成立期以降、国際関係や世界経済の枠組みに組み込まれ、1880年のインフレ好況も世界経済の好況に対応していた。一方で松下財政下の1883・84年の不況は1882年の世界恐慌と連動し、特に横浜港を起点とする貿易の変動は、その影響下にある産業にも打撃を与えていた。その中でも輸出高の6割から7割を占めた生糸は、フランスをはじめとする国際市場の冷え込みにより輸出の減少をきたし、養蚕地帯の農家経済に大きな影響を及ぼした。

秩父地方の農家経済も例外なく世界経済の変動に大きく左右され、農村の生活は窮乏し、負債農民が増加して行った。これらの養蚕地帯における負債農民の集団は、各地において騒擾事件を頻発させていった、1884年には群馬事件が発生し、神奈川県南多摩郡で負債農民の大集会が開催された。こうした養蚕地域における経済状況の悪化と負債農民による騒擾事件の勃発は、その後の蜂起を誘発する要因となっていった。

国際情勢の変動による養蚕地帯の経済状況の変化に対して、以下に地域的な視点から秩父地方を概観していく。

秩父地方を中心とする山間地域では、麦類と穀類が畑地での生産物の6割を占めるにもかかわらず、毎年米と麦を移入しており、食糧の自給が困難な状況にあった。これを補完するために養蚕・生糸生産と林業が重要な役割を果たしていた。特に養蚕は当地における農業経済を支える主要産業となっていた。

中山間地域の養蚕農家によって生産された生糸は大宮（秩父市）、小鹿野、下吉田（吉田町）などの市で販売され、そのうち精良糸は横浜へと運ばれて国際市場で取り引きされていった。生糸が外貨獲得商品になると、品質改良と増産が殖産興業にとって重要な課題となった。その結果、秩父の薄精糸社、皆野・野上下郷（長瀞町）・上吉田の竜門社などが設立され、揚返工程を通じての社員による生糸収荷、共同販売が展開された。

こうして生糸や絹織物、薪炭が商品経済に巻き込まれるようになると、各農家は投機的変動の波に直接翻弄されることとなった。生活が困窮に陥った農家は、金貸しや質屋に頼らざるを得なかった。金貸しの中には、高利貸し営業者が広域の農民に貸し付け、高利を要求したことからさらに困窮する農家が増大していった。

2.2　政治的背景

秩父困民党事件発生の誘因となったもう一つの背景として、当該地域の政治的状況についても

触れておく必要がある。埼玉県史において指摘されているように、秩父困民党事件は中世以来の農民一揆の系譜のみにつらなるものではない。秩父困民党が村落共同体の中における社会関係通じて、独自の思想や組織を形成していった過程に、単に生活上の窮乏を訴える農民一揆とは一線を画す差異が存在する[(4)]。

秩父地方から西群馬にかけての地域では、1880年代以降に自由党に入党するものが現われた。警察関係記録によると、1884年には自由党左派の大井憲太郎が秩父を訪れて政談演説会を開催し、同年にはのちに秩父困民党の中心メンバーとなる高岸善吉、坂本宗作、落合寅市、井上伝蔵、新井蒔蔵らが入党したという。これら党員の多くは、中小農民であった点に特徴があった。

困民党事件に直接的につながる活動としては、1883年に高岸善吉や坂本宗作らの提唱で村々の有志を集め、秩父郡役所に負債返済問題について高利貸し説諭の請願を行ったことにあった。こうした困窮する農民の支持を受けるかたちで度々各地において山林集会が催された。このような政治活動の活発化に伴って、秩父困民党は運動体としての体裁を徐々に整えていった。自由党が掲げる「困民ノ幸福」は単なる政治的自由民権であったが、困窮した生活実態に沿った活動という点において秩父困民党の運動は、実質的な社会的自由民権の確立を目指していた。

この後の事件の顛末については、これまで数多くの論文や書籍において言及されてきているため、ここではその詳細については概要を記すにとどめたい。1884年11月1日、秩父困民党は吉田町の椋神社に結集し、同日夜には小鹿野町に進撃して小鹿野警察分所を破壊、高利貸し数件を打ち壊した。翌日、秩父困民党は大宮郷に向かった。その後も各地の戸長役場に乗り込んで人足の強要と金品を徴収した。11月5日に大宮郷に入った警察隊は、憲兵隊の協力のもとに秩父困民党参加者の検挙に着手し、事件は終息に向かっていった。この蜂起参加者は8,000人から10,000人とされ、その4分の1が吉田町の出身であった。事件後の裁判では、総裁の田代栄助をはじめ、他6名の秩父困民党幹部が死刑判決を受けるなどして、一連の事件は幕を閉じた。

しかしながら、会計長であった井上伝蔵は死刑判決を受けたものの北海道へ逃れ、偽名を使いながら晩年を石狩で過ごした。俳諧の宗匠であった井上は、事件後も潜伏先の北海道から地方の俳諧サークルへと作品を送り続けていた。井上に代表されるように、秩父困民党事件参加者の中には、政治的指導者であると同時に地域の文化活動のリーダー的役割を担っていた。

2.3 学校閉鎖・新道建設

1872年、学制発布により近代教育体制が整備されつつあったが、基本的には受益者負担の原則にあるとともに、小学校の授業料の外に高額の付加金が人々に重くのしかかった。地租改正や徴兵令反対と結びついて、学制反対の騒動が各地で発生し、小学校毀焼事件が勃発した。

秩父地方においても人々の間で学制反対の声は多く、石間村において学齢人口134人中、就学生は75人にとどまるなど、就学率は低かった。秩父困民党事件に関わった人々の間でも普通教育の一時停止を要求し、授業料や協議費、学校費を滞納するなど過重な経費負担を強いる小学校教育に批判的であった。もちろんそれは、教育自体への無理解ではなかった。国会の即時開設の

ような高度な政治目標を掲げていたように、秩父地方の人々は比較的識字率が高く、教育的土壌が整えられてきた。広範囲に張りめぐらされた俳諧ネットワークの存在を引き合いに出すまでもなく、文字を読み書きする高いスキルを秩父地方の人々が身に付けていたがために、国会の即時開設といった高度な政治目標を掲げた運動が成立し得たのである。

教育費の負担に加えて、秩父地方の人々を悩ませたのが、新道建設であった。小鹿野町や下吉田村などの関係者により、児玉と秩父を結ぶ秩父新道建設工事の嘆願書が県へ正式に提出されたのは、1881 年である。新道建設に当たって、沿道各村は人夫および寄付金を差し出すことが義務づけられた。たとえば、大宮郷に課せられた人夫は、1 戸当たり 3.7 人で、1 戸当たりの寄付金額は 9.53 円であった。一方、下吉田村の場合、1 戸当たりの人夫は 16.4 人、1 戸当たりの寄付金額は 2.90 円であり、沿道 17 ヵ村の中でも大きな開きがあった[(5)]。これに対して埼玉県令吉田清英は、1884 年 3 月の通常県会において秩父新道建設にあたっての地元負担が過大であることから、橋梁架設費を県費負担とする予算案を提出したが、議長らの反対により否決された。これにより橋梁架設費を含めた新道建設の沿道各村に対する負担はさらに増すことになった。

いずれにせよ秩父地方を中心とした地域の養蚕農家は、生糸生産が世界経済の動向に大きく左右される中で、困窮し、多額の負債を抱えることが少なくなかった。こうした経済的な要因に加えて、秩父新道建設にあたる沿道各村にとって、多額の建設費用負担や苛酷な労働力の提供は、教育費の負担とあいまって、大きな不満として蓄積されていった。そこへ自由党党員の拡大といった政治的背景が重なったことで、秩父困民党事件は自由民権運動を象徴する事件として記憶されることになった。このような説明が関連地域の自治体史や自由民権運動史の中で主流をなして来た。

しかしながら、こうした秩父困民党事件への広範囲にわたる参加者の獲得は、政治的・経済的背景だけで説明しつくすことはできない。近代における自由民権運動という歴史の一部を切り取るだけでなく、その前後の時間軸を踏まえるとともに、文化活動という別の側面からのアプローチが必要となる。

3. 奉納された句額の分析

3.1　句額奉納時期の分析

すでに図 1 で示したように、幕末から近代にかけて句額が奉納された範囲は、小鹿野や皆野、寄居などといった秩父地方を中心とする北埼玉に集中するとともに、藤岡や甘楽などの西群馬、長野県の臼田にまで及んでいる。森山の調査で存在が明らかになった句額の総数は 118 枚で、1 社につき 1 枚奉納されている事例もあれば、長野県佐久町（現 佐久穂町）平林の平林観音堂には、時期の異なる 11 枚の句額が奉納されている事例もある。もちろん森山の調査時点での残存状況を示していることから、実際に奉納された句額の総数はより多かったと推測される。また、118 枚のうち正確な時期が不明の句額は、31 枚存在している。なお、句額と総称しているもの

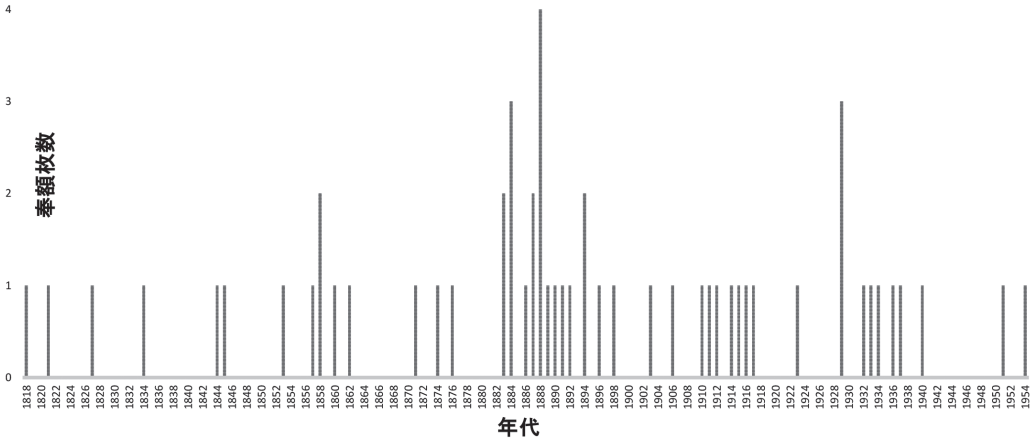

図２　句額の年代別グラフ（森山軍治郎（1981）、pp. 77-81 より筆者作成）

の、その中には「甲源一刀流」や「吉田流弓術」など武術に関する額もここにカウントされている。

年号の判読可能であった句額を年代順にグラフ化したものが、図２である。

最も古い句額は平林観音堂に奉納された元文２年（1737）銘の句額で、このほかに1700年代の句額は３枚あるが、グラフを掲載する上でこれらは省いている。反対に最も新しい句額は、皆野町下日野沢の水潜寺に奉納された昭和29年（1954）のものである。俳諧を通じた文芸活動は、幕末から近代を経て、戦後に至っても継続されていたと考えられる。興味深いのは、最も多くの句額が奉納された時期は、秩父困民党事件が勃発した時期とほぼ重なっている点である。

3.2　奉納された句額の事例

次に実際に句額が奉納された事例を２つ取り上げ、奉納の状況をより具体的に分析することにしよう。

①　米山薬師堂（吉田町小川戸）

米山薬師堂は延享３年（1746）に建立され、目の守護ならびに養蚕守護としての信仰を集めてきた。山頂に町指定有形文化財となっている本堂が設けられ、毎年５月には「塚越の花まつり」が開催され、多くの参詣者で賑わう[(6)]。

森山の調査では万延年間の句額２枚と判読不明のもの１枚が記録されている。筆者が現地で確認できた句額は万延元年銘のものである。養蚕という経済活動と密接に結びついた信仰の対象として建立された米山薬師堂に、時期は限定されるものの、複数の句額が奉納されていることは、経済活動と俳諧ネットワークの結び付きを示唆するものといえる。

これらの句額には複数の俳諧とともにその作者名が記されている。句額全体の再調査はもちろんのこと、こうした作者一人一人に焦点を絞った分析を試みる中で、俳諧ネットワークをより具

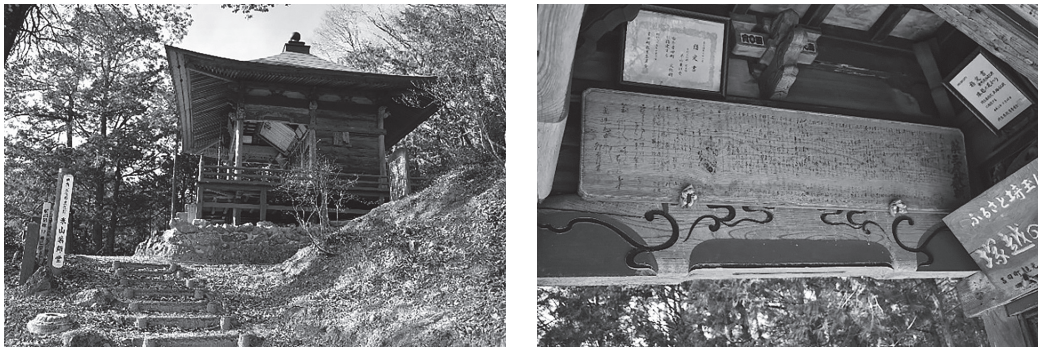

図３　米山薬師堂と句額（筆者撮影）

体的に描き出すことが必要であろう。また、これ以外にも明治 22 年（1889）銘の「気楽流柔術」に関するものなど、森山調査では記録されていない複数の額が存在することが筆者の調査で確認された。このことは、森山個人による研究調査には限界があることを示しており、地元自治体史編さんなどの機会を通じて、より系統的かつ網羅的な調査が求められる。

②　宗吾神社（小鹿野町長留）

宗吾神社は幕末に義民 佐倉宗吾郎を祀る下総の宗吾霊堂からこの地に勧請された。本地域の住民は羽黒神社の氏子であったものの、慶応年間における獅子舞をめぐる騒動の結果、羽黒大神、諏訪大神を分祀し、宗吾大明神とともに祀っている。反政治権力の象徴でもある宗吾霊堂から勧請されているように、宗吾神社の存在自体が地域の政治的意思を示している。

著者の現地調査では残念ながら句額を実見することはできなかったが、森山の調査によれば、明治 4 年（1871）銘の句額が 1 枚、明治 17 年銘（1884）の句額が 2 枚残されている。図 2 の句額の年代別グラフと照らし合わせると、宗吾神社に奉納された句額は、秩父困民党事件発生の際に多く奉納された句額の一部であることが分かる。

宗吾神社に奉納された句額についてさらに詳しくみていくことにしよう。

図４　宗吾神社（筆者撮影）

武家を廃いして徴兵さわぎ
親の苦労が絶はせぬ
幸三

おがん（御願）かけよか佐倉の神へ
末はおまいとそうご（宗吾・添う）さん
梅月

これら2句の内容は、明らかに蜂起を暗示している。特に佐倉宗吾郎を俳諧の内容に込み入れていることは、宗吾神社への奉納句額を特徴づけている。このような秩父地方を中心とする寺社に奉納された句額は、養蚕農家による文芸活動の存在を示すとともに、タブー視されがちな政治的意見を交換する場としての文化活動の存在を示唆している。もちろん、秩父困民党事件への参加者全員が、困民党の活動に理解をしていたわけではない。武装蜂起の際に動員させられたことに不満を持つなど、一枚岩の集団ではなかった(7)。

したがって、決して俳諧ネットワーク＝秩父困民党事件参加者ではない。ただし、本稿で指摘したいのは、日常生活の一部である俳諧という趣味の活動を通じて育まれた人間関係が、政治活動への参加を呼びかけやすい土壌づくりの一助になっている可能性である。経済的困窮など共通の課題が横たわっていたとはいえ、人々にとって蜂起に参加することは、逮捕される危険性と隣り合わせであり、容易ではなかったはずである。それでもなお、広範囲にわたる村々から蜂起への参加を可能にした背景の一つとして、文化活動という日常と政治活動という非日常が緩やかにつながっていたことを指摘することができる。

4. 俳諧ネットワークの広がりとその意味

4.1 俳諧ネットワークの構造

では秩父困民党事件という広範な政治的活動を支えた可能性の高い俳諧ネットワークは、どのような構造を持ち、いかにして形成されていったのであろうか。

俳諧のネットワークは、江戸のような大都市部を中心に活動する宗匠と呼ばれる指導者を中心としたグループが核となっている。このグループは「座」と称され、特定の座の中で俳諧に親しむだけでなく、異なる座のメンバーとも交流が図られることがあった（図5）(8)。時には複数の座から参加者が集い、「連」と呼ばれる俳諧の場が設けられることもあった。座が宗匠を囲んだ常設の集団であるのに対して、この連は句会や句集の出版を目的に立ち上げる集団のことで、複数の異なる座の結節点としても機能した。つまり、宗匠を中心に形成された座は、参加するメンバーの文化活動を支える空間であるものの、外部に対して閉ざされておらず、むしろ積極的な交流によって個人単位や座単位でのヨコのつながりが構築されていた。俳諧ネットワークとは、複数の座や連によって体系化された構造を指していた。この座や連に参加するメンバーは、俳諧創

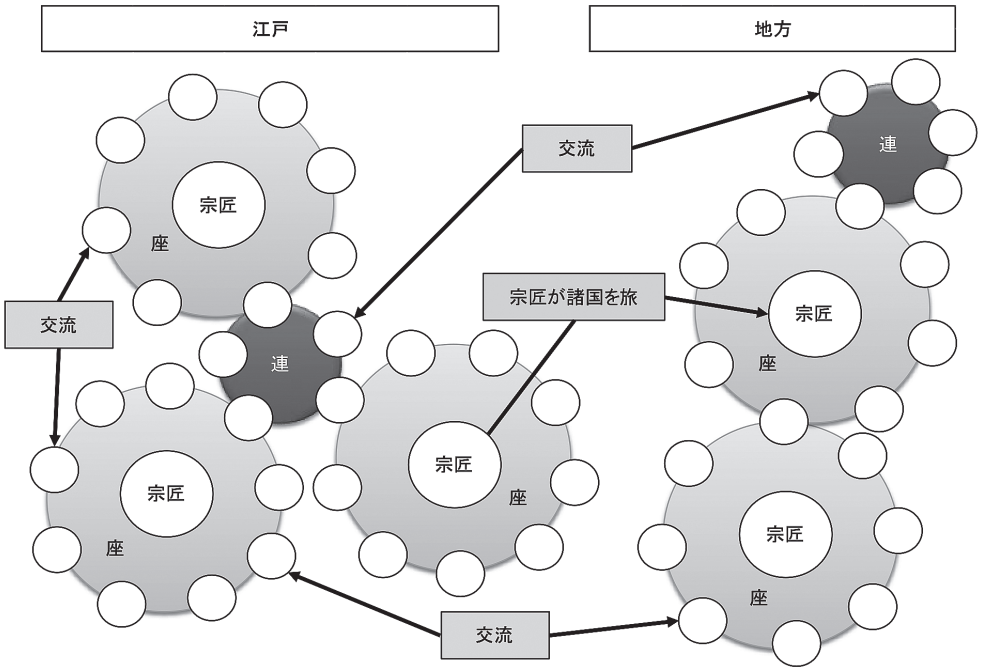

図５　俳諧ネットワークの模式図（若山（2007）より筆者作成）

作の前では、日常生活の身分に捉われることなく対等な関係で接することが求められた。アイデンティティ・スイッチングは、こうした俳諧ネットワークの中に深く刻み込まれていた。

このような俳諧ネットワークは、都市部に限定されるものではなく、地方においても同様の座や連が形成されていった。地方における座や連の形成には、都市部の宗匠が諸国を旅し、その先々で座を開設したことに起因していた。やがて、地方の座に所属するメンバーの中からは、宗匠として活動する者が現われるようになった。地方に居住する宗匠は、自らが主宰する座の活動を活発化させるとともに、周辺の他の座とも交流を図った。地方の座同士が俳諧創作における交流を図る中で、都市部と同様に連が地方でも催されることもあった。都市部と地方の関係は、宗匠の移動だけでなく、座や連の間でも交流が図られた。つまり、地方の座や連の文芸活動は、特定の地域に限定されるものではなく、都市部との交流の中で育まれていった。一見すると、中山間地域の文化活動は、地理的な条件によって分断されているように受け止められる。しかし、実際には周辺の村々で形成された座や連の間で交流が図られるだけでなく、都市部の宗匠や座、連といった俳諧ネットワークとも深いつながりを持っていた。広範囲に形成された俳諧ネットワークのおかげで、地方に居住する人々であっても、日頃から都市文化の恩恵を受けることができたのである。

4.2　俳諧ネットワークはどのように拡大したのか

では、俳諧ネットワークは、どのようにして都市部から地方へと広がっていったのだろうか。

手がかりの一つとなるのは、俳諧という文芸活動の形式に由来する。他の「嗜み」と比較して、俳諧の場合、特別高価な道具を必要とせず、演舞や演奏を必要としないために必ずしもリアルタイムで場を共有する必要もない。江戸と地方のように、地理的に離れていても俳諧創作を他者と共有することは比較的容易にできた。

このような俳諧の特性を活かして全国的な公開俳諧コンテストを1800年に企画したのが、鈴木牧之だった。鈴木は魚沼郡塩沢村に住むちぢみの仲買商人であった。ちぢみは、冬季における農家の特産品であり、多くの仲買人によって都市部へと運ばれていった。俳諧に堪能な父を持つとともに、幼少の頃から文芸や絵画に打ち込み、俳諧の素養を身に付けていた鈴木は、こうした地域の特産品であるちぢみの仲買商人として全国を移動する中で、俳諧コンテストを企画するようになっていった。コンテストに当たっては全国の宗匠に採点を依頼する一方、応募料として一句につき16文を支払えば誰もが参加できるシステムを確立し、4,022句を収集することができた。俳諧の収集地域は越後だけに限らず、房州や武州から寄せられた句もあった。これらの地域は、ちぢみの通商ルートと重なっており、商業活動と文芸活動の広がりが連動していたことを物語っている。こうして各地から応募で集まった句は、宗匠による採点の結果、299句が入賞となった。入賞者たちの句は印刷され、それを祝う句会が催された。さらに入賞句は句額として彫り込まれ、現地の神社に奉納されたという(9)。

この鈴木の事例が示すように、文芸活動は、地理的な条件を超えて広範囲にわたっており、経済活動がそれを結果的に支えていた。秩父地方を中心とする俳諧ネットワークもまた、生糸の流通ルートを介して構築、拡大していったと推察される。俳諧を嗜む人々はたとえ山間地域に暮らし、その地域外へと頻繁に移動することは無かったとしても、文芸活動を通じて容易に都市部を含めた他地域と交流を持つことができた。自由民権運動などの当時の政治的動向を知り、問題意識を醸成していく上で、こうした情報ネットワークとしての俳諧活動は有効に機能していただろう。

また、潜伏先の北海道から定期的に俳句指導を継続させていた井上伝蔵の事例のように、俳諧ネットワークという趣味の活動網は、政治的・社会的な表舞台から遠ざけられたとても、決してフラジャイルな組織ではなかった。むしろ、しなやかさゆえの強靭さを備え、持続的な活動の場であった。だからこそ、秩父困民党事件の前後に複数の句額が各地の寺社に奉納されたように、政治意識を育み、共有化する場として機能しただけでなく、戦後に至っても句額の奉納が確認されたように、人々を緩やかに結びつける精神的紐帯として存続しつづけることができたのである。

5. 考　察

5.1　文化と経済、政治

秩父地方を中心とする地域で発生した秩父困民党事件は、俳諧ネットワークという文芸活動に

よる人々のつながりを部分的ではあるものの、基礎としていた。奉納句額にも表現されているように、俳諧ネットワークは人々のつながりの存在を示すだけでなく、広範囲にわたって政治的な意識を醸成し、共有するためのツールとしても機能していたことが推察された。

また俳諧ネットワークは、宗匠を中心とする文芸サークルとしての座を最小単位とし、座同士や連を通じてさらにその外部のネットワークとも緊密な関係を構築していた。こうしたネットワークの構築には、生糸生産などの商業活動ルートが深く関わり、経済活動と文化活動とが密接な関係におかれてきたことが明らかとなった。

つまり、文化は特定の個人や集団だけが楽しむ「私事」という側面に加えて、社会全体とつながる「公事」でもあった。もちろん浅野も指摘しているように、すべての文化的な活動が即社会に開かれた存在になっているわけではない。だが、これまでの句額をてがかりに分析を試みた俳諧ネットワークのように、経済活動を基盤にして形成されるとともに、時として政治的な活動にも結び付く可能性を秘めているのが、文化活動の側面なのである。文化活動に関わる人々自身が、その活動と社会との関係についてあまり意識をしようとせずとも、結果的に文化はその外延部に広がる社会と何らかのつながりを持っている可能性がある。

富永京子は近年の若者による社会運動を分析する観点として「出来事」と「日常」の２つから分析している[(10)]。「出来事」とは、デモなどの予め時間や場所を定めて行う組織的な活動を指し、「日常」は組織とは関係なく個人による生活の営みを指す。「出来事」と「日常」は完全に分離されるものではなく、「出来事」は「日常」で培われた個人の問題意識を組織的な活動へと反映させることで成立し、「日常」もまた「出来事」の結果（たとえばデモに参加したことで逮捕されるなど）によって影響される。デモのような非日常は、非日常を生きる人々によって形づくられているわけではない。むしろ、一市民として日常を生きる人々の問題意識の延長線上に、社会運動のような非日常が存在しているのである。

この富永の研究を下敷きに、秩父困民党事件とも関連した俳諧ネットワークはどのように捉えることができるだろうか。秩父困民党事件という非日常の「出来事」は、秩父地方を中心とする人々の「日常」とも深く関わっていた。世界経済に否応なく巻き込まれて陥った経済的困窮、学校建設や新道建設に伴う負担の増加による不満感の広がりとそれに対する問題意識の醸成は、近世から継続されてきた俳諧という文芸活動に基づくインフォーマルな結びつきによって支えられてきた。秩父困民党事件という「出来事」と俳諧創作活動という「日常」は互いに影響を持っていたという点で、富永の議論にも通じるだろう。

さらに付け加えるならば、「出来事」としての事件は終焉を迎えたとしても、再び取り戻される「日常」としての文化活動は存続した。事件以後も「出来事」はたびたび引き起こされる一方、社会に対する問題意識を常に投げ掛ける「日常」としての俳諧ネットワークは存在意義を失うことは無かったのである。

5.2　趣味のつながりのその後

これまでの先行研究が明らかにしてきたことは、趣味という一見すると内向きの活動が、実際には広く隅々までそのネットワークが張りめぐらされ、時として政治運動のような社会を動かす鍵となり得るということである。しかしながら、その時代や地域は限定的に捉えられる傾向にあったこともまた事実である。

たとえば、森山は各地の寺社に奉納された句額に注目し、そこから俳諧ネットワークの復元を試みようとした。すでに述べたように、本地域における句額の本格的な悉皆調査が今日まで実施されていない状況を考えれば、森山の調査・研究は山間地域の文化的活動を豊かに描き出し、自由民権運動の背景を明らかにしたという点で今日でも高く評価することができる。他方で、俳諧ネットワークは秩父困民党事件後も存続し続け、人々の楽しみの場を提供し続けただけでなく、社会問題に対する意識の醸成や討論の場としても機能し続けた。

秩父困民党事件の範囲にも含まれていた群馬県甘楽町では、近世より人々が俳諧創作のために集う「月なみ会」が催されていた。秩父地方と同様に、甘楽とその周辺地域の藤岡や高崎、富岡などで開催された絹市による商業活動の隆盛によって、都市部から多くの俳人（宗匠）が出入りした。これを契機として句会が各地で誕生し、そのうちの一つが甘楽であった。こうした句会には、矢田お陣屋（吉井藩の前身）の武士グループが活躍した。役所を会場として開放し、会費の取り立て、江戸の選者への点評依頼の交渉などを政務の合間に武士が行うなど、身分を超えた俳諧創作の場が育まれていった。

大正期から昭和初期にかけては、旧町村単位で月なみ会が開かれていたが、甘楽町の発足を期して1961年に複数の句会が「鏑南雅の会」として統合された（図6）[11]。甘楽町とその周辺地域では近世から続く文芸活動の系譜は、近代社会の中でも引き継がれ、戦後に至ってもかたちを変えながら存続されていた。もちろん、精糸会社としてスタートした甘楽社小幡組が設立されるなど、甘楽は養蚕や生糸生産が盛んな土地であり、俳諧を嗜む人々の経済的拠り所となっていた。俳諧創作の活動は、月なみ会のような集団における定例会だけでなく、「甘楽町新聞」へのメンバーの作品投稿にまで及んだ。

甘楽町新聞は、町内で会社を経営する町民によって1969年に創刊された。1970年代には月に4,000部を発行し、全戸に無料配布されていた。掲載される記事は、踏切警報機設置問題、PTAのあり方、役場の窓口対応の改善、神社建設

芭蕉の句碑を建立
鏑南雅会々員が

小幡忠霊塔入口に俳聖芭蕉翁の句碑が立ち、11月25日その除幕式が行なわれました。これは、昭和8年に発足した鏑南雅会（現在会員三十名）の人たちが建設したものです。おこりは、元禄の昔、俳聖芭蕉翁が弟子の貴を従え、陸奥の旅への途中、日野村（現在鏑南市日野）鹿島にきました。その縁故により巡礼刀にも俳句が流行し、明治年間には、甘楽町にも有名俳人が輩出しました。なかでも、髯水（野中治郎、新屋）、雲花（野中治郎、新井）、蘇山（新井雄五郎）などは各地の宗匠と親交厚くし大正初期には、句会は盛大をきわめました。また、小幡の殿（関条吉）、新屋の甘寿（山田喜作）の両氏は、今日まで後輩を導いてきた功労者です。

昭和になって前次衰えたのを憂慮し、昭和8年鏑南雅会と改組して発足、それより例会を続けています。

このように、古い伝統のある郷土文化を永久に記念するためゆかりも深い芭蕉翁の句碑を立て、郷土の俳聖の一端をしのぶよすがとしたのです。

句碑の大きさは横約七十六センチ、高さ約百五十一センチで、花崗岩。

旅人と
我名呼ばれん
初時雨

と、芭蕉が陸奥へ旅立つときの

電気のちしき

コンセントを使おう

電化器具はコンセントから使いましょう。

生活文化の向上した今日は家庭用電化器具を持つことは、ぜいたくとは、いえません。また家庭電化器具の普及は能率をみます。しかも必要品でありますから、電化器具をかえて買いなおしましょう。

すべて、コンセントの点検整備をいたしましょう。コンセントは、

零嶽（上）は忠霊塔入口に建てられた芭蕉の句碑（下）はその会員たち

図6　鏑南雅の会による芭蕉句碑建立の記事（甘楽町広報より）

問題、町長や町議の選挙問題など、地域が抱える課題に対する提起が中心となっていた。その中でもゴミ処理の問題については、町全体での議論に発展し、町役場を動かして、ゴミ処理施設建設にまで結びつけた。地域の情報を人々に提供するだけでなく、地域課題を議論し、社会を変革する装置としての役割を甘楽町新聞は担っていた[12]。

この甘楽町新聞には「鏑南雅の会」の俳諧だけでなく、町内の文芸創作グループである「かぶらはん」メンバーによる短歌などが毎号掲載されていたように、町民による創作活動の発表の場であるとともに、こうした町民が甘楽町新聞の支持者になっていた。つまり、俳諧創作活動に携わる人々を含めた文芸創作ネットワークが甘楽町に形成され、そのネットワークは地域新聞というメディアを支援していた。人々はこのメディアを通じて、地域問題解決の討論や運動の場を得ていた。ゴミ処理施設建設問題だけでなく、城下町を流れる水路の清掃活動を呼びかけ、錦鯉を水路に放つなどの運動が展開された。地域の歴史や文化に対する理解を深めるための史跡巡りツアーなども企画され、結果的に甘楽町の旧市街地は国重要伝統的建造物群保存地区に指定された。

さらに付け加えるならば、甘楽町新聞主幹の男性や元甘楽町長を中心とした甘楽町民、富岡市の西毛短歌会のメンバーなどが1988年に「富岡製糸場を愛する会」を設立した。この会は「『地元住民が富岡製糸場の価値をおろそかに考えることなく、富岡製糸場を核として地域の文化・経済の発展につなげられないか』との思いから、富岡製糸場の価値を伝え、市民の智恵を結集していくこと」を目的としていた[13]。2003年の群馬県による世界遺産登録推進の発表を受け、この会は富岡製糸場の世界遺産登録を目指す市民運動の一翼を担っていった。2014年に富岡製糸場は他の構成資産とともに世界文化遺産に登録された。

つまり、秩父困民党事件以後も存続し続けた俳諧などの文芸活動でつながるネットワークは、戦後に至って甘楽町新聞などのメディアの支援者となることで、より住民の身近な活動として浸透していった。そこでもまた趣味によって繋がったネットワークは、生活上の課題解決や文化遺産の保存といったある種の政治課題を住民自身の手で討議し、解決の糸口を探る活動の孵卵器の役割を果たした。1970・80年代、専業養蚕農家の数は少なくなり、養蚕や生糸生産による経済活動が直接的に俳諧ネットワークの基礎となりうる状況ではなくなっていた。それにもかかわらず、人々は頻繁に「日常」と「出来事」とを往還し、住民生活をより豊かなものへと変えていった。

6. まとめ

SNSなどのコミュニケーションツールが発達した今日の社会において、さらに共通の趣味などを持った人々が集う環境が用意されている。だが、歴史を紐解けば、少なくとも近世から継続された文化活動によるネットワークは存続し続け、結果的に人々の社会参加を促してきた。

本研究は絹産業や秩父困民党事件と深い関りを持ってきた句額の奉納に見られる俳諧ネット

ワークを中心に分析してきた。その他方で、俳諧ネットワークを復元する上で欠かせないのは、芭蕉句碑の存在である。「鏑南雅の会」が活動の節目に芭蕉句碑を建立しているように、芭蕉句碑は全国で俳諧を嗜むグループによって建立されてきた。全国に3,200基あまりの芭蕉句碑が現存し、そのうち220基が群馬県内にある[14]。芭蕉の出身地である三重県よりも建立数で群馬県が上回っていることは、群馬県という地域の特異性を物語っている。本稿では触れられなかったが、俳諧ネットワークの実態を把握する上で、芭蕉句碑を建立したグループの存在にも目を向ける必要があるだろう。

また、幕末から近代にかけて流行した趣味の縁は、俳諧だけに止まらない。やはり秩父困民党事件の範囲とも重なる群馬県藤岡市とその周辺地域では、俳諧ネットワーク興隆の同時期に、和算ブームがあった[15]。和算の問題を解いたグループは、集いを記念して、地元の寺社に「算額」を奉納した。こうした俳諧以外の趣味のネットワークを今後明らかにしていくことで、趣味の活動が持つ社会的意義をより具体的に描き出すことができるに違いない。

《注》

（1） 梅棹は大阪府の委託を受けて開催された「大阪文化振興研究会」の議論において、「文化は、どっちにせよ「私ごと」、私事だというわけです。それが最近はだいぶんかわってきた。文化は個人の趣味の問題ではない、文化は公共のことなのだ、という認識がだいぶん出てきた。文化の問題は私事ではなくて、むしろ公事なのだ、あるいは国事なのだということが、だんだんはっきりしてきた」と述べた。たとえば、19世紀までの科学がひそやかな個人の楽しみごとであったが、今日では国家的な問題として捉えられていることがその証左であることを示した。大阪文化振興研究会編（1974）『大阪の文化を考える』創元社、pp. 48-49。

（2） 浅野智彦（2011）『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店

（3） 池上英子（2005）『美と礼節の絆 ── 日本における交際文化の政治的起源』NTT出版株式会社

（4） 埼玉県（1988）『新編埼玉県史』通史編5近代、pp. 383-398

（5） 吉田町（1982）『吉田町史』、p. 616

（6） 米山薬師堂周辺は、1974年に発足した「米山薬師観光協会」により公園化が進められてきた。

（7） 荒川村（1983）『荒川村誌』、p. 194。蜂起に際して各村から動員された者の中には、食物の要求を困民党側に要求したものの、聞き入れられず、困民党が強奪した金銭を反対に奪いとってしまうといったことも発生した。

（8） 若山秋雄（2007）「「江戸時代のWeb 2.0」の戦略的活用」『季刊政策・経営研究』第1巻第3号、p. 24。若山は俳諧ネットワークとともに、「講」の広範囲にわたるネットワークについても紹介している。たとえば、輪島漆器には大黒講が販売価格の統制を行いながら、庶民による協同購買組合としての「椀講」や「家具頼母子講」とも深く連携していた。こうして人々は所属する講中で一定の資金を貯めながら、高価であるが、品質の高い輪島漆器を確実に手に入れることができた。近世における商業活動において「講」などのネットワークは相互扶助的な性格を持つとともに、生産地と消費地の関係を維持することに貢献していた。

（9） 池上英子（2005）、pp. 270-272。

（10） 富永京子（2017）『社会運動と若者 ── 日常と出来事を往還する政治』ナカニシヤ出版

（11） 甘楽町（1979）『甘楽町史』、pp. 1250-1251。甘楽町（1960）『甘楽町広報』昭和35年12月15日号、p. 2。戦後、甘楽町内では文芸雑誌が刊行されたり、新たに歌会が誕生したりするなど、文化活動に対する人々の関心は高かった。総合文芸雑誌「かぶらはん」は、県立甘楽農学校に通学していた

人々によって、短歌・俳句・詩等短詩文学を誰もが投稿できる雑誌として1949年に創刊された。また、ふゆくさ歌会は、短歌研修の集いを基礎として、1959年頃に結成された。

(12)　鈴木五郎（1971）「手づくりの新聞が町を支える ── 住民運動をささえる甘楽町新聞」「月刊福祉」第54巻第6号、pp. 32-39。鈴木は甘楽町新聞を「隣り近所の人の意見や生活の悩みと町行政への提案など身近な問題がたくさん載っていて、自分のまちの人たちの考えや生活を知ること」ができる新聞と評した。筆者も町役場職員の方に話を伺ったところ、生活に溶け込んだ、極めて身近な新聞であるとのことだった。

(13)　山崎益吉（2009）「市民の支援と産業遺産の関わり」『群馬・産業遺産の諸相』高崎経済大学附属蚕業研究所編、日本経済評論社、pp. 153-155。「富岡製糸場を愛する会」が発足した直接の契機は、1987年に富岡製糸場の操業停止を受け、甘楽町の有志が中心となって学習会を開催したことにあった。

(14)　弘中孝（2004）『石に刻まれた芭蕉』智書房

(15)　藤岡市（1988）『藤岡市史』資料編 民俗を参照のこと。算額奉納の事例は東北地方から近畿地方に及ぶ。真偽は不明であるが、近代において、藤岡は和算の始祖である関孝和の出身地とされた。このことと和算ブームはあながち無関係ではないだろう。

A Study on the Political Process of Haiku Networks as a Basis of Economic Activity:
Clues From a Chichibu Shrine

Masaomi TSUCHIYA

Abstract

This paper examines how in pre-modern times in Japan, social participation through cultural activities was linked to politics and the economy, following a concept of hobbies connecting people and communities (shumi-en).

As a result of the analysis of Haiku poetry writings at a shrine at Chichibu, it was clarified that economic activity according to networks of people connected by their creative activities of poetry were respected as a type of political process in the public arena.

Keywords: sericulture, Haiku network, phrase amount, hobby, political movements